



寅子を羨望したのであろう、私の父

NHK朝ドラ「虎に翼」の評判が高い。視聴率好調で、あやかり本の売れ行きもよいという。何人もの友人から「面白い」「お勧め」と声をかけられた。「過去を語りながら実は今を問いかけている」「ドラマに出てくる主人公の『ハテ?』は秀逸」「今年の流行語大賞ものだ」などとも。まことに結構なことである。

ドラマは、わが国の女性法曹の先駆者三淵嘉子をモデルにした、主人公・猪爪寅子いのづめとみこの人生を描くもの。寅子は、学生として、弁護士として、また官僚や裁判官として、女性ゆえのハードルと生涯闘い続ける。そして、後進への道を切り開いていく。

ここからは、私事を語らせていただきたい。私の亡父のことである。僭越ながら、三淵嘉子と対比させて。

父は、1914(大正3)年岩手県和賀郡黒沢尻町の生まれ。この年は「五黄の寅」に当たる。最強の運勢とされる生まれ年が、九星気学では「五黄土星」、十二支では「寅」。両者が重なった36年に一度の「五黄の寅」生まれの人は運氣最強とされる。しかも、父の誕生日は元日であった。おそらくは「運氣最も盛ん」を意識して「盛祐」と名付けられた。

同じ年の11月に三淵嘉子が生まれている。生まれも育ちも、父とは接点のない別世界の人が、「五黄の寅」の生まれだけが共通で、生きた時代を共にした。劇中「寅子」の命名は、「五黄の寅」年の生まれからとされており、「寅子」は、苦労を重ねながらも翼を得て「運氣はなほだ隆盛」な人生を全うすることになる。が、父の生涯は違った。向学心を持ちながら、教育を受ける機会を得られなかったことを無念とし続けた。

「虎に翼」のドラマは寅子の明律(明治)大学専門部女子部法科の入学から始まる。三淵嘉子は、それ以前に東京女子高等師範の附属高等女学校を卒業している。父は、地元の小学校5年から飛び級で入試を受け、旧制黒沢尻中学校に入学した。

同校は県内では5番目の中学として1924年に創設されており、父はその2期生となった。そこそこの秀才ではあったのだろう。卒業後は、上級学校への進学を希望したが生家の零落で叶わず、仙台の株屋の「小僧」となった。齢16である。

寅子が明大法科で学んでいるころ、父は

樺太で働いていた。1938年寅子が、高等試験司法科に合格したころ、父の勤務する株屋は不況のあおりで倒産。伝手を頼って、ようやく盛岡市役所に吏員として職を得ている。父の目からは、経済的に不自由のない寅子の境遇と学生生活は何とも羨ましい限りと映るだろう。

その後間もなく父は戦争という時代の嵐に翻弄されることになる。1939年5月に召集アイグンされて、弘前の聯隊からソ満国境の愛瑠の兵営に駐屯。ここで、仲秋の名月を2度見ている。「満州の月はね、盆のような月じゃない。地平線から昇るタライのような月なんだ」と言っていた。幸いにも、戦闘を経験することはなく、いったんは召集解除となって娑婆に戻るが、間もなく海軍に徴用されて横須賀に勤務。さらに2度目の召集によって終戦を弘前で迎えている。45年9月の二度目の召集解除まで、およそ6年の軍隊暮らしだった。

戦前、戸籍とは別に、兵役に就いた者には「兵籍」がつくられた。兵の所属や移動や昇進を詳細に記載し、軍の編成に不可欠な基礎資料とされた。戦争とは、膨大な事務作業を必要とするのだ。先年、父の「兵籍簿」を入手して、二等兵から曹長までの克明な記録に驚いた。あらためて兵役での父の苦労を肌で感じた思い。

こうして、望んだ就学の機会を得られなままに父の前半生は終わった。父は、寅子のように翼を得ることなく、羽ばたくことも、虎のように駆けるでもなく、生涯を終えた。人の志を阻むものは性別だけでなく、貧富の格差でもあった。過去のことでない。今もなお。

(弁護士 澤藤統一郎)

次号予告

「法と民主主義」2024年8/9月号(No.591)

【特集】

第五福竜丸被爆から70年

——突きつけられた課題の今……(仮題)

●針生誠吉基金●

本誌は、故針生誠吉先生からの多額のご寄付によって、発行を支援していただいております。